

胃癌における成熟樹状細胞の意義とVEGFの与える影響について(胃8)

著者	塚山 正市, 大村 健二, 吉田 貢一, 田中 洋子, 渡邊 剛
雑誌名	日本消化器外科学会雑誌
巻	37
号	7
ページ	1080-1080
発行年	2004-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/3968

OP-1-176

胃癌における成熟樹状細胞の意義と VEGF の与える影響について

塚山正市, 大村健二, 吉田貢一, 田中洋子, 渡邊 剛

(金沢大学大学院心肺・総合外科)

【目的】樹状細胞 (DC) は, 未熟段階で腫瘍抗原の捕捉と遊走を, 成熟後は抗原提示をおこなう。一方, 血管新生因子である VEGF は免疫抑制作用を有し DC の成熟化を阻害する。今回, 胃癌組織での総 DC, 成熟 DC の発現と VEGF, 予後, 病理組織学的因子との関連性を検討した。【対象】胃癌患者 174 名を対象とした。【方法】腫瘍最深部切片で, 抗 S-100, 抗 CD83, 抗 VEGF 抗体を用い免疫染色を施行した。S-100, CD83 陽性細胞数を面積で除し, 総 DC 密度 (TDD ; 個/cm²), 成熟 DC 密度 (MDD ; 個/cm²) とし, 成熟 DC 比 (MDR ; MDD/TDD) を求めた。VEGF は腫瘍細胞の 80%以上の発現を境に 2 群化した。【結果】腫瘍部の TDD, MDD, MDR は平均 76.0, 8.8, 0.17 で, 正常部では 40.1, 13.5, 0.31 であった。MDR は年齢, 腫瘍径, 進行度, リンパ節転移の有無, リンパ管侵襲の有無, VEGF 発現強度で有意差を認めた。MDD 高値群で有意に良好な 5 生率を認めたが, TDD, MDR の高低では差を認めなかった。多変量解析で MDD は Hazard 比 1.883 で有意な予後規定因子と判定された。【考察】MDD 高値は有意に良好な予後をもたらす因子であった。しかし, 胃癌組織では DC の成熟化が阻害されており, VEGF による免疫抑制の関与が示唆された。
